防災安全対策特別委員会 令和５年９月 22 日
地域力推進部 資料１番
所管　地域力推進課

関東大震災 100 年フォーラムについて（災害ボランティア事業）

１　日　　時　　令和５年９月 17 日（日）　　午後１時から４時

２　会　　場　　消費者生活センター　大集会室

３　来場者数　　７１人

４　実施体制

「災害時におけるボランティア活動等に関する協定書」に基づき、大田区社会福祉協議会、地域パートナーシップ支援センター、大田区の３者が連携して実施した。

５　目　　的

関東大震災の発生から 100 年。総理府に設置された地震調査研究推進本部では、首都直下地震で想定されるマグニチュード７程度の地震の 30 年以内の発生確率を 70％程度と予測している。

激甚災害では誰もが被災者となる可能性があり、被災後の生活再建を地域で行うことの重要性や災害ボランティアの必要性が注目されている。

阪神・淡路大震災や東日本大震災で得た教訓を通して、災害に対する意識を高めるとともに、災害ボランティアへの理解を深める。

６　内　　容

（１）講　　演

○テーマ　　「大地震、火災を目の前にして～阪神・淡路大震災からの報告～」

○講　師　　・松山　雅洋　氏（神戸学院大学教授、
元神戸市防災危機管理室室長）

○内　容

阪神・淡路大震災の発災当時、神戸市消防局職員として対応した救助活動などの経験に基づいた、現代都市における大地震と火災被害の状況や防災、減災のための準備、対応について

（2）パネルディスカッション

〇テーマ　　「その時どうする？その前、その後にすべきこと！」

〇パネリスト　・松山雅洋　氏（神戸学院大学教授）

・高橋実芳子氏（阪神・淡路大震災の語り部）

・仙　裕司　氏（災害ボランティア経験者）

・高木仁根　氏（社会福祉協議会・おおた地域共生ボランティアセンター長）

・渡邉　淳　　（大田区　区民協働担当係長）

〇内　容

甚大な災害では、被災者が被災前の日常生活を取り戻すのに長い時間を要する。大地震や二次災害から身を守り、避難所での生活を送りながら、住宅と生活の再建などに対応しなければならない。

被災時に実際に起こる困りごとや震災後に災害ボランティアをどのように活用すべきかなどについて、学識経験者や災害ボランティア経験者、行政職員がそれぞれの知見や経験から報告やディスカッション行った。

また、被災経験者からは、日頃の近所付き合いや防災訓練をはじめとする地域での人と人とのつながりが、被災時には最も大切だとの経験談があった。

7　参加者の声

・講演を聞いて、阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）では、強い揺れで子どもを守るための行動を取ることすら難しいということを強く実感できた。

・阪神・淡路大震災を実際に体験した人の具体的な話には重みがあった。避難所での生活など今回のイベントで得た知識を活かし、日頃から災害に備えていきたい。

・東日本大震災の被災現場を目のあたりにして言葉が出なかったという災害ボランティア経験者の話から、被災者の心に寄り添うことの大切がよく伝わってきた。また、被災した教訓を語り継ぎ受け継ぐ活動は意義のあることで、とても共感することができた。

・災害ボランティアという言葉は知っていたが、活動内容を理解していなかった。災害時には、自助・共助が大切。私も登録を検討したい。

8　当日の様子

講演の様子

パネルディスカッションの様子